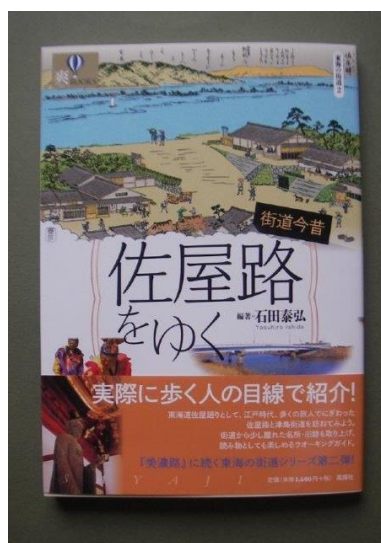


佐屋路をゆく

郷土史家 西 羽 晃

2019年5月30日に『佐屋路をゆく』（石田泰弘著、風媒社発行）が発行されました。著者は愛西市佐織公民館長で海部地方の歴史に詳しい方です。この本は熱田から佐屋へ向けて紹介していますが、私が逆方向で実際に歩いた経験を思い出しながら書いてみました。



尾野山随風 17号（2019.04.01）で書きましたが、慶長6（1601）年東海道桑名宿が制定され、桑名から宮（熱田）までの海上七里の渡しが開始されました。しかし海上を行くため、途中の危険も多く、欠航することもありました。寛永11（1634）年に三代将軍・徳川家光が上洛し、その帰途の8月8日に桑名で泊まり、翌日は船頭平（現愛西市）から佐屋（現愛西市）まで架けられた船橋を渡ったと言われます。船橋とは川の中に船を並べて固定し、その上に板を並べて歩けるようにした橋です。家光の一行は佐屋から熱田に行っています。この時に佐屋宿と万場宿（現名古屋市中川区）が設けられました。その後の寛永13年には岩塚宿（現名古屋市中村区）、正保4（1647）年に神守宿（現津島市）が設けられ、寛文6（1666）年には幕府の直轄道路に指定されました。すなわち国道となったのです。そして東海道のバイパスとしての役割を担いました。

桑名から佐屋までは船渡しで「3里の渡し」と呼ばれました。明治時代以前は長島を横切る鰻江川があり、そこを通過して木曾川へ出て、さらに佐屋川を通過して佐屋へ着きました。幕末の佐屋宿は本陣が2軒、脇本陣が1軒、旅籠が31軒ありました。

現在、佐屋川は廢川となり、今の佐屋は川に面せず、陸地の中にあつて、往時の面影は残っていません。佐屋からの道をたどりますと、津島市埋田（うめだ）付近は耕地整理によって道路は失われています。幕末の神守宿は本陣が1軒、脇本陣がなく、旅籠が12軒と小さな宿場でしたが、今も宿場の面影を少し残しています。新川には砂子橋が架かっていますが、新川は庄内川の放水路として天明7（1787）年に開削されました。当時から橋が架かっていました。その橋の手前の砂子（現あま市）は立場だったと言われます。立場とは宿場と宿場の間に在って休憩する茶店などがあつた処です。

次の宿場である万場宿と岩塚宿との間は2kmほどで、その間に庄内川が流れており船渡しでした。両宿は小さな宿場なので、月のうち上旬を万場、下旬を岩塚が宿場として機能しました。幕末の万場宿は本陣1軒、脇本陣なし、旅籠10軒です。明治になって庄内川には大橋が架けられ、現在は架け替えられています。明治の大橋の親柱（明治31年銘）が堤防の下に保存されています。

幕末の岩塚宿は本陣が1軒、脇本陣はなし、旅籠7軒の小さな宿場でした。少しばかり古い家も見られます。しばらく行くと近鉄のガードを潜ります。上は佐古木駅です。高架になる前はこの辺りに松並木が残っていましたが、今はありません。名古屋の中心部を通り抜けて熱田に達します。

佐屋路は名古屋に近いので、都市化されて開発が進んでいますが、歩いて見ると古い面影に出あうこともあります。